大阪商業大学学術情報リポジトリ

# 加藤慶一郎著
# 『清酒業の社会経済史―19／20世紀の眺望―』


| メタデータ | 言語: ja<br>出版者: 大阪商業大学比較地域研究所<br>公開日: 2023-02-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 木山, 実, KIYAMA, Minori<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1308 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

〔書評〕

# 加藤慶一郎著
# 『清酒業の社会経済史―19/20世紀の眺望―』

木　山　　実

1．はじめに
2．本書の構成
3．各章の紹介
4．むすび

## 1．はじめに

本書は加藤慶一郎氏(以下「著者」)による単著『近世後期経済発展の構造―米穀・金融市場の構造―』(清文堂、2001年)に続く2冊目の単著である。著者は近年では、いわゆる藩札や私札などの近世紙幣に関する研究を精力的に進められており、そのテーマで研究代表者、あるいは研究分担者になって連続して科研費も採択されている。昨年(2021年)末には『日本近世社会の展開と民間紙幣』(塙書房)という編著本を出されており、すっかり近世紙幣の研究者のイメージが強かったが、本書を献本して下さった時には、かつて著者や私も参加して商社史研究会をやっていたころ、著者が清酒に関係するテーマで発表されていた記憶がよみがえった。

日本経済史・経営史を専攻する者は、かつては近世(江戸時代)を対象とする人も多かったが、近年では多くが近現代を対象としている。このような中、著者は近現代も対象とされているが、“近世もできる研究者”として非常に貴重な存在であるといってよいであろう。また近世経済史の研究者は、最近ではほとんどが文学部日本史学科という、いわゆる国史系の出身者が占めているように思うが、著者は経済学部出身の数少ない近世経済史研究者でもあることも付言しておきたい。

私が著者と初めてお会いしたのは、1997年に東北大学で開催された社会経済史学会の懇親会であったと記憶するが、それ以来、お互いの最初の赴任地が比較的近かったことや上

記の商社史研究会にともに参加したりしたことで、お会いする機会も多く、何度となくご教示やご示唆をいただくことがあった。

## ２．本書の構成

まずは、本書の構成を示しておこう。

序　　章
第Ⅰ部　19世紀　江戸時代における経済発展とその継受
　第１章　幕末期における下り酒輸送船の経済学　―前渡金の機能
　第２章　酒造業創業の長期的推移の全国的観察
　第３章　三井の清酒業への進出　―維新期を中心に
　第４章　「小学校貸付会社」の設立と経営　―明治初年の伊丹町
第Ⅱ部　19/20世紀転換期　明治時代における産業発展
　第５章　明治30年代における各府県の工産物生産　―清酒を中心に
　第６章　明治後期・大正期の灘酒造業　―外来酒造家による発展を中心に
　第７章　明治・大正期の堺酒造業　―灘への進出を中心に
第Ⅲ部　20世紀　昭和時代における現代化の諸相
　第８章　昭和初年における清酒流通の再編　―三井物産を中心に
　第９章　清酒業のイメージの変遷　―戦後を中心に
　第10章　高度経済成長期の清酒メーカー　―経営機械化に関する聞き書き
終　　章

## ３．各章の紹介

以下では、評者なりの雑感も交えながら、各章の内容を紹介させていただきたい。

第１章では、近世中期以降、上方から江戸への清酒輸送にあたった樽廻船について、酒造家が樽廻船に対して「加入」(出資)した、いわゆる廻船加入について検討されている。評者の恩師である安岡重明氏(故人)は、近世の「非領国」や大商家、あるいは財閥の研究と並行して日本での会社発生(資本結合)史にも関心を寄せ、生前この廻船加入についてもしばしば言及されていた[1)]のが懐かしく思い出された。本章で著者が多く引用しているのは柚木学氏(故人)の研究であるが、安岡氏もこの柚木氏の研究に依拠して廻船加入のことを書いている。柚木氏の経済史研究への貢献を再認識したところだが、著者は『続海事史

1)例えば、安岡重明『財閥経営の歴史的研究―所有と経営の国際比較―』(岩波書店、1998 年)20頁。

料叢書』という史料集を改めて読み込み、さらに自身で蒐集した史料を追加して検討を加えている。柚木氏はかつて、廻船加入には廻船の運賃で発生した徳用(収益)をその加入(出資)割合に応じて配分する「徳用配分型」と、加入銀に利子を加えて年賦償還し、一回の輸送ごとに酒造家の積荷高を規定する「年賦償還型」の２類型があったと指摘していたが、著者は廻船加入は一定程度の多様性をもちながらも本来は「徳用配分型」であった可能性が高いが、安政期ごろに「年賦償還型」に大きく転換を遂げていたとしている。そしてその転換は、内証増運賃(事実上の運賃引き上げ)に起因するのではないだろうか、としている。本章でのテーマについては評者は大学受験レベル、すなわち菱垣廻船の後に出てきたのが樽廻船であり、最終的には樽廻船が菱垣廻船を上回る勢力になった云々程度で留まってしまっているのだが、本章を読めば、単なる「菱垣廻船 vs 樽廻船」という図式ではなく、樽廻船(問屋)の背後にいた酒造家がむしろ大きな支配力を掌握しており、その酒造家たちが大消費地である江戸までの輸送手段を確保するのに、いかに懸命になっていたのかがよくわかる。

第２章では、農商務省商工局工務課によって1909(明治42)年に調査された『工場通覧』(1911年版)と、この『工場通覧』刊行後から最近までの創業状況が把握できる『日本の名酒事典』(講談社、増補版1998年刊)という２種の史料によって、酒造家の創業数変化を追って酒造業の長期的動向の把握を試みている。これらの史料によって、16世紀以降の創業数がわかるという。結論的には、1909年から1990年代にいたる約80年間において、江戸期以前の創業者数はそれほど変化しておらず、明治期の創業者は著しくその数を減らした。すわなち酒造家の事業は短命化したという。また今日の酒造会社の約４分の１が幕末維新期を挟んだ1861～1880年という20年間に創業したことが明らかにされた。この時期に創業が集中したのは、1871年の廃藩置県に伴って旧来の営業特権が廃止されたこと(よって自由に参入できた)、また1877年の西南戦争によるインフレ景気にあおられて各地で創業が活発化したのではないかとしている。さらに地域分析として、特に関東と近畿での酒造家の創業をみているが、関東では明治後期以降には停滞的様相が濃かったのに対し、灘五郷を含む近畿では長期的に創業が活発であったが、廃業も多く、競争と新陳代謝が激しかったとしている。

第３章では、明治初年における三井と清酒業との関わりについて扱っている。明治初期に三井呉服店の大阪店は西宮で酒造業を始め、東京でも三越得右衛門名義で酒問屋を開業していた。西宮の酒造業は三井家の直接経営ではなく、番頭たちの知り合いに委託したもので、東京の酒問屋も当時の三井家の呉服商売の不振から三越得右衛門家という別の架空の家を作って、いわば三井家から切り離した形で従事していたものである。西宮の酒造業の経営は軌道に乗らず、1875(明治８)年末には清算に向かい、東京の酒問屋の方も経営は順調ではかったが維持された。それでも状況は好転せず閉店されることになり、1889年夏頃には荷蔵や家屋などは処分された。近世日本を代表する富豪の三井は、江戸時代には呉服商と両替商を２本柱としていたが、明治期にこれ以外の事業に着手していた例として、評者も明治初期に三井が短期間ながら製茶業に参入していた事例を示したことがある[2)]。

この製茶業参入も著者が示された酒造業や酒問屋業と同様に、結局は失敗に終わるのだが、近世の大商人三井は幕末までに祖業たる呉服商売が不振に陥っており、幕末維新という激動のなかで何か新たな収益部門を見出そうと試行錯誤を重ねていたということであろう。

第４章では、兵庫県伊丹で幕末までには支配的な酒造業者の地位を築き、また大名貸にも進出していた小西新右衛門家が、1872(明治５)年設立の伊丹小学校貸付会社とどのような関わりを持ったのかを見ながら、その貸付会社の経営実態を明らかにしている。幕末維新期の小西家では、兵庫商社に始まり、大阪通商会社、日本銀行などの官主導事業、さらに地元兵庫新川社、伊丹周辺の鉄道事業などさまざまな事業に参画し、多角化を進めていたが、1872年には兵庫県庁から伊丹で小学校を造るよう慫慂された。それは官金には頼らず、地元の富豪・商人たちで財源を確保した上で小学校を設立・運営せよという、誠にご無体なお達しだったようにも思われるが、県庁から慫慂を受けた小西家では伊丹小学校貸付会社を設け、そこに自家を含む伊丹の有志が資金を拠出し、それを学区内に貸し付けて運用し、その運用益で小学校を設立・運営した。だが貸付先を探すのは困難で、1876年には資金捻出方法が貸付による利殖から小西家からの寄付へと移行し、小西家が事業を継承することになる。しかしその事業の発展性は乏しく、小西家が未来を託せるほど魅力あるものにはならなかったという。民間で資金を手当てして地域で小学校設立を求められたのは小西家だけではなく、全国的にみられたようだが、それは根源的には当時の政府財政の事情、特に文部省予算が極めて限られていたという事情によるものだったらしい。国民全体から税を徴収するという近代税制が未確立の時代にあっては、地域の名望家に資金拠出を促す(というよりむしろ強要)という、現代では理解しがたい雰囲気が強く感じられるところである。

第５章では、農商務省が発行した『輸出重要品調査報告』に拠って、日本の工業化が進展した明治30年代後半期(1900年代)における各地の地域経済での酒造業の位置づけが検証されており、清酒が全国の多くの道府県でかなりの比重を占めたことが明らかにされると同時に、地域間でかなりの差異が存在したことが指摘されている。上記『輸出重要品調査報告』によって作成された「表５－３　各府県の工産品」は４ページに及ぶ表であり、非常に興味深く拝見した。例えば九州諸県の箇所をみると、宮崎県のみ「清酒及焼酎」とある一方、九州の他の県で清酒が上位に入っているのに焼酎が出てこない。九州といえば現在では焼酎の消費量が多いことで知られるが、九州で焼酎の生産・消費が盛んになったのはもっと後のことなのだろうか等の疑問が生じた。また同表には沖縄県が含まれていない。明治30年代後半期といえば日清戦争後であり、琉球処分から四半世紀が経とうとしていた時期においても農商務省が沖縄県を調査対象に含めていないのは一体なぜなのかという、本論とはややずれた疑問を感じたのである。

第６章では、18世紀半ば以降、日本一の酒造業地帯となっていた灘五郷に明治期の半ば

---

2)木山実「明治前期における三井の製茶業」(関西学院大学『経済学論究』第73巻第２号、2019年)。

から大正期にかけて、他地域から進出した外来酒造業者についての考察がなされている。本章を読み始めたところで、評者はかつて経営史学会の学会誌『経営史学』第35巻第１号(2000年)の「〈年間回顧〉1998年の日本経営史」の一部を担当した際、上村雅洋氏の論考「伏見酒造業と灘酒造業」(関西学院大学『経済学論究』第52巻第２号、1998年)を紹介したことを思い出した――本章でも上村氏のこの論考は引用されている。評者が上村氏の論考を拝読した際には、月桂冠のブランドで知られる京都伏見の大倉家が積極果敢に灘に進出し、灘でも酒造を行っていたということを知ったが、本章では、それは大倉家だけの現象ではなく、関東、中京、近畿、四国など広範囲から灘に酒造家の進出がみられ、1919(大正８)年頃には灘酒造家のうち約３分の１が外来の酒造家によって占められていたことが示されている。他地域から灘に進出してきた酒造家は、それぞれの地元では上層の酒造家であった。彼らは灘の銘水「宮水」や灘五郷が原料米とした播州産の米を求めて灘へ進出してきたというが、彼らが灘に進出する際には灘の在来酒造家の酒蔵の借り入れを手始めに進出するケースが多かったという。灘に進出した酒造家は、借り入れた酒蔵で従来雇用されていた杜氏をそのまま雇うことができたのか、また造った清酒は進出前の地元のブランド(月桂冠など)をそのまま付けて販売したのか、あるいは灘で新たに別のブランドを設けて販売したのだろうか等、疑問がわいた。ちなみに評者は、かつて拙稿「松風工業に関する試論―３代目松風嘉定の考察を中心に―」(関西大学経済・政治研究所『研究双書』第170冊、2020年)で明治以降、大正期にかけて京都の陶磁器産地に愛知県瀬戸や石川県能見など他の陶磁器産地からの進出がみられたことを示したことがあるが、本章を合わせ読むことによって、在来産業の主要産地に別の産地からの集団的進出という現象がけっこうみられたのだろうという感触を得た。

第７章は、第６章でみたような灘五郷へ進出した酒造家群を明治30年代(1890年代～)に多く輩出した大阪府堺市の酒造業について検討している。まず堺から灘に進出した酒造家の規模として、彼らは最大規模の階層を形成していたことが確認されたうえで、明治30年代半ばには堺の清酒醸造においても灘五郷に隣接した播州米や摂津米や郷の水「宮水」の使用が定着しており、また労働力についても播州や丹波の杜氏を多く雇用していたことが示されている。第６章の紹介で評者が疑問として書いた灘進出時に借り入れた酒蔵では、従来その酒蔵で雇われていた杜氏をそのまま雇ったのかについては特に触れられていない。そして第７章の後半では、広島県賀茂郡や福岡県三潴郡に代表される酒造業地域の台頭を受け、九州や中国地方の市場を失ったことが、明治30年代以降に始まった堺酒造業の衰退の要因であったという明快な分析がなされている。逆に三潴郡の酒造業の発展要因として、同地の酒造家たちが明治10年代に御影や西宮などを視察して灘五郷で採用されていた醸造法の導入をはかったことが上げられている。現代ならば“企業秘密”として、同業者の視察見学は断られそうなものだが、灘五郷の余裕というか鷹揚な態度が感じられるところである。

第８章は、戦前期最大の総合商社であった三井物産が1931(昭和６)年に灘(魚崎郷)の中堅酒造家松尾仁兵衛家と一手販売契約を結んで清酒販売に参入しようと試みた事例研究で

ある。なぜ大商社の三井物産がそれほど利益が見込めそうもない清酒取扱いへの参入を試みたのかといえば、三井財閥系の三井鉱山会社が生産する清酒醸造では防腐剤として使用可能なサリチル酸の酒造業界への売り込みを三井物産がはかったこととと、三井物産自身が昭和初年に深刻化する不況のなか、国内市場拡大戦略をとったことが背景にあったようだと著者は推論する。だが一手販売契約締結からわずか１年で松尾仁兵衛商店側からの申し出によって一手販売契約は解除に向かい始め、さらに10ヶ月後に解約となったという。経済界の巨人三井物産の手にかかれば、東京や名古屋の旧来からの酒問屋を組織し松尾商店の清酒「金正宗」の販売にあたることなど極めて容易なことであったかのように読みとれる。灘の中堅酒造家であった松尾家にとって、三井物産から申し出を受けるなど、「予想もしなかった事態」であったであろうと著者はいうが、最初の申し出から終始三井物産側のペースで物事が進められたようにも思われ、松尾家側が東京の旧来の酒問屋業界の秩序を修正してまで清酒販売増を望んでいたのかどうかは怪しいところであり、松尾家側にしてみれば意外と“有り難迷惑”だったのかもしれないようにも感じた。

第９章では、1950年代から2000年頃にかけて刊行された灘五郷に関する刊行物を素材に、それらで酒造業地や酒蔵がどう描かれているかをみることによって、日本社会における酒造業の位置づけがどう変遷したのかを明らかにしようとしている。高度経済成長前夜の1953（昭和28）年頃には、近代化学工業的な面と伝統産業的な面の二面性が清酒業がもつ一つの特徴であるという認識がみられたが、高度成長が進むにつれ、古い蔵元や酒蔵が減少し、四季醸造蔵、精米機、蒸米機、自動製麹機、自動絞機、タンク等によって象徴される近代化が酒造業界で進行したことが描かれた。またその近代化の過程では、清酒メーカー内でも「古い年配の人」と「若い技術者」の間で伝統と革新という対立軸がみられたという。このまま近代化、現代化の進行が描かれていくのかと思って読み進めたが、意外なことに2000年頃には、酒造業に関わる技術者を「蔵人」、製造責任者を「杜氏」と見立てて伝統的な酒造りが再評価され、「灘の酒造りのイメージは江戸時代のそれに立ち返った」としている。本章で用いられている刊行物には、観光案内書や神戸市広報課が発行したグラフ誌などが含まれており、それら刊行物から、一産業のイメージの変遷を読み解こうとする手法に著者ならではのユニークさを感じた。なお本章（p.205）で1977年放送のNHKドラマ「風見鶏」によって神戸異人館への注目が集まったということが紹介されているが、生粋の神戸っ子である著者から、「神戸がハイカラな町というイメージを持たれるようになったのは、NHKの『風見鶏』の放送の後ぐらいからではないかな」というお話しをかつて伺ったことを思い出した。維新期に開港された時から神戸は華やかでハイカラなイメージが漂っていたと思い込んでいた評者は、このご示唆から着想を得て、かつての神戸にはハイカラな部分だけではない影の部分もあったという趣旨で拙稿[3)]をまとめたことがある。

第10章は、兵庫県伊丹市に本社を置く小西酒造株式会社（「白雪」の酒銘で知られる酒造メーカーで上記の第４章でも扱われたところ）で勤務した人々を対象に、著者らが実施し

---

3）木山実「日本一の貿易港神戸が産んだ日本一」（関西大学経済・政治研究所『産業セミナー』213、2015年）。

た聞き取り調査での証言をまとめたものである。ここでは清酒業界が飛躍的な発展を遂げた高度経済成長期に、小西酒造の総務課や庶務課などのオフィスで電動計算機、コンピューター、ワープロなどの電子機器が導入された頃の様子が語られている。オフィスでの機械化に焦点が当てられており、ここでも著者の視点のユニークさが発揮されているように思われた。本章では、高価な電動計算機や伝票会計用のオルミグというドイツ製の機械が同社で導入された時には、当時の社長が先陣にたって導入にあたったことが語られており、高度成長期の羽振りの良さが感じられる。また新しいシステムや機械の導入時には、サントリー、キッコーマン、麒麟ビールなど、いわば同じ醸造業企業に照会したり見学させてもらったりしたとのことであり、第７章について指摘したことと重複するが、企業間で社内事情についての情報交換を割とするものなのだなと感じた。またコンピューターについて、それが同社で導入された際には、社内の反発がかなり強かったことが語られていて、現代では不可欠になっているものでも、世に出始めた頃には相当な反発、抵抗があったというのはやや意外に感じられた。

## 4. むすび

全体を通読して、著者の読書量の多さと史料蒐集へのこだわりを感じた。評者は、かつて著者の前任校の研究室を訪問したことがあるが、そこは足の踏み場もないほどに書籍類で溢れかえっていた。歴史系の研究者の蔵書数は、他の分野を専攻している者より多いとしばしば言われるが、著者の蔵書数は歴史系の人の中でもかなり多い方ではないだろうか。本書の引用注なども、著者の読書量の多さを反映しているように思われた。また評者は、著者がコロナ禍以前に国内外を問わずしばしば史料調査に赴かれていたことを存じ上げているが、本書は著者のフットワークの軽さをも反映しているように感じた。

最後に書評にありがちな、“ないものねだり”を一つ書かせていただこう。2002年に灘の酒造メーカー白鶴酒造が、戦後長らく清酒出荷量でトップであった京都伏見の月桂冠を抜いた[4)]。酒造業地帯全体でみれば、灘は京都伏見の生産量よりは大きかったが、１社ごとにみた場合は、長らく伏見の月桂冠が業界１位だった。しかし2002年に灘の白鶴がついに首位にたったのである。昨今アルコール・メーカーの中でも特に清酒業界にとっては厳しい時代となっているが、白鶴が首位に立ったこと自体は快挙といえよう。評者も著者と同じく灘五郷が横たわる阪神地区近隣に住まう者であるが、この白鶴の快挙に関心を寄せ、白鶴が首位にたてた背景、要因を探るべく、白鶴の関係者に聞き取り調査ができないものかとかつて模索したことがあった。だが評者は残念ながら聞きとりをするほど、酒造業に関する知識を持ち合わせていない。本書の第10章でも示されているように、著者はこれまで酒造業関係者への聞き取り調査を何度かされているのであって、事情が許せば、是非と

4) 日本経済新聞「白鶴、月桂冠を抜く―日本酒最大手、戦後初の交代」2003年２月８日、朝刊、p.11。

も白鶴酒造関係者への聞き取りをやっていただけないものかと感じたのである。

以上、雑駁な書評となってしまったが、ご海容を乞う次第である。

（大阪商業大学比較地域研究所研究叢書第21巻、御茶の水書房、2022年３月28日）